

編輯顧問  
倉橋惣三  
と  
キンダーブック

⑧

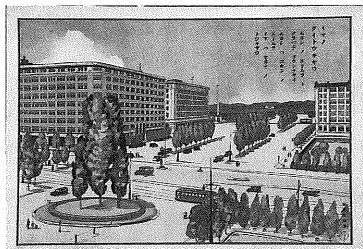
「広がる世界、伸びる日本」というメッセージ  
— 昭和八、九年の「比較」を主題にした三編 —

浜口順子

(大学教員)

キンダーブックは、大正十五年の幼稚園令により、保育項目（遊戯・唱歌・談話・手技）に「観察」が付け加えられたことを受けて、「観察絵本」として創刊された、教育を明らかに目的とした最初の絵本である。「理知と芸術の交響楽」というモットーのもと、一流作家の絵や文章を採用し、専門家の指導・監修のもとに編集された。

この連載ではこれまで創刊初期（昭和二、六年）のもの、しかも復刻版の中に収められていない号を中心に紹介してきた。昭和十年代に入ると、特集テーマによっては軍国主義的な色彩がいつそう顕著になってくるが、今回はその入り口付近で、「比較する」という手法を使っているものを幾つか見てみたい。というのは、戦前のキンダーブック全一八九編のうち、比較を主題としたものは六編あり（「塩と砂糖」「今と昔」「暑い国と寒い国」「どっちが速い」「世界一」「大きい船小さい船」）、そのうち四編が昭和八、九年に集中していることに興味をひかれたからだ（右の六編のうち、昭和六年の「塩と砂糖」は今年の春号で紹介したが、比較というよりむしろ、もともと対照的なものとして幼児にも認知されているものを並列させ、



▲画像2 今の大東京



▲画像1 昔の江戸村

改めて深く見直すような内容だった)。  
 今回取り上げる「比較もの」は、引き比べることによって、日本の素晴らしさ、日本が世界でどのような位置にあるか、いかに発展してきたのか、を知らせようとするメッセージが強く感じられる。

「イマトムカシ」

(第五輯第十二編 一九三三(昭和八)年三月)

比べられている対象は、「江戸と東京」「旅行」「船」「通信」「乗り物」「雪国の交通」「幼稚園」「寺子屋」と小学校「おうち」「灯り」「火消しと消防」「衣服」である。表紙をめくると、まず、遠く江戸城を望む日本橋辺りの風情(画像1)と「今の大東京」(画像2)とが左右ページに繰り広げられる。その次は、広重の絵のような「昔の旅」(画像3)。背景の富士山、駕籠かき、虚無僧(それを指さす子ども)、茶屋で休む者、馬上でキセルをくゆらす旅人など、細かい描き込みが面白い(本田庄太郎画)。これに対して「今の旅行」(画像4)は、ボーイさんが給仕するよ



▲画像4 今の旅行



▲画像3 昔の旅

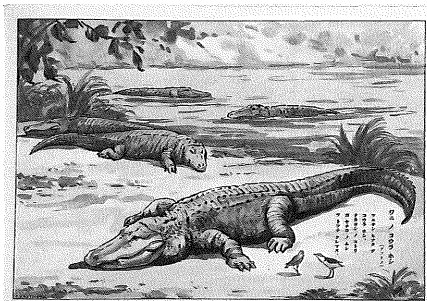


▲画像5 昔の幼稚園・今の幼稚園

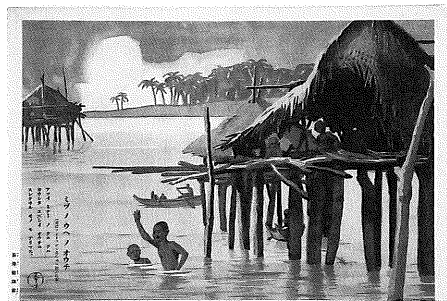
子どもたちとフルコースの西洋料理を食している。幼稚園の今と昔（画像5）という  
と、服装の違いはもちろんだが、遊び方が  
相当違う。「昔」は、先生に合わせて歌を歌  
うか遊戯をするなどしている。「今」は、机  
の上に置かれた空き箱や色紙の切れ端など  
の材料を使って、それぞれの子どもが、思い  
思いの人形のおうち（のようなもの）を作っ  
ている。模倣的で子どもらしい動きの乏し  
いお遊戯が批判されていた時代の「今」、  
子どもがそれぞれの工夫をしながら製作す  
る「手技」がよしとされ、それを補助しつ  
つ見守る保育者の関係図が見て取れる。窓の外には、園庭で何人かの  
子どもが一緒にヒル積み木で一つのものを協同して作る様子が垣間見  
え、当時最先端とされていた保育方法が具体的に示されている。

「アツイクニトサムイクニ」（第八輯第四編 一九三三年七月）

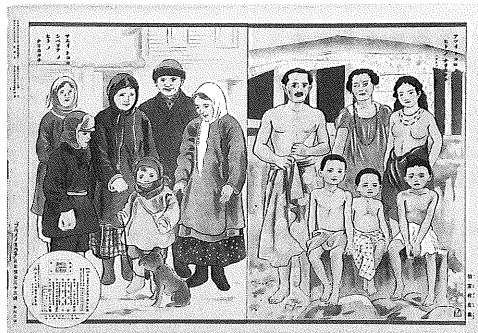
前半は、アフリカや「南洋フィリピン島」、インドなどの暑い地域  
（画像6、7）の、後半では氷に閉ざされた北アメリカや南極・北極



▲画像6 ワニの甲羅干し（アフリカ）



▲画像7 水上のおうち（フィリピンのモロ族）



▲画像9 シベリアの家族・サモア島の家族



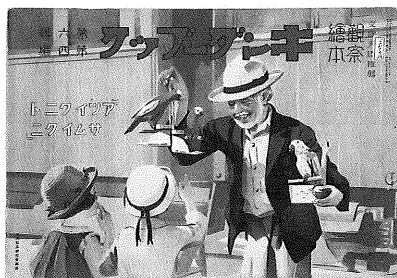
▲画像8 氷の上で魚釣り(北アメリカ)

など(画像8)の動物や人々について、紹介されている。最後のページには、暑い国と寒い国の、各六人の家族が並んでいて、服装がずいぶん違うことが比較できる(画像9)。原文では、それぞれの「ヒトノナリカタチ」と書かれている。

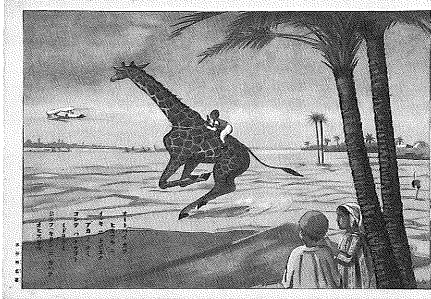
どういう意図の絵なのかわかりにくいのは、表紙(画像10)である。これから背景の電車に乗るところなのだろう、日本人らしき二人の小さな服装の男の子と女の子が、西洋人らしき優しいなおおじいさんに色鮮やかなオウムを見せてもらっている。この二人は、「南洋の駅の売り子さん」のページにも登場するのだが、また別の白人らしき背の高い紳士を頼るようになって立ち、現地の売り子を見下ろしている。あたかも、暑い国・寒い国は、自然は豊かだが人間生活の程度は低いと考え、それを西洋人と日本の子どもが見物しているように見えてしまう。

『トッチガハイ』(第八輯第十一編一九三四(昭和九)年二月)

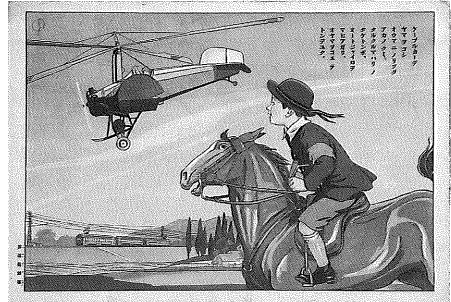
これは、二つのチームに分かれて、子どもたちが乗り物を次々に乗り換え、世界を股にかけたバトンリレー競争をする、何ともスケール



▲画像10 オウム売りのおじいさん(表紙)



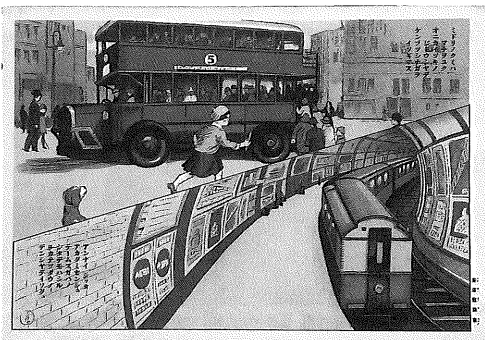
▲画像12 ジラフ(キリン)と飛行機



▲画像11 馬とオートジャイロ

そのような欠陥はありつつも、なかなか楽しめる。多分、スタートは日本、そこから中国、南洋の島、アフリカ、フランス、イギリス、ロシア、満州、ゴールは「新東京公園、ゴールめがけてひた走り、どっちが速いかひた走り」で終わる。勝ち負けは、読者にはわからないのである。牛、馬(画像11)、ダチョウ、キリン(画像12)、ゾウなどの動物や、人力車、帆掛け船、オートバイ、軍艦、飛行機、二階付バス、地下鉄(画像13)、駕籠、汽車、トロイカなど、実にいろいろな乗り物も登場する。

の大きな一冊である。しかし、キンダーブックは、全ページをいろいろの画家たちに描き分けてもらう作り方をしているので、このような一貫した内容のものを作者たちに振り分けるのはさぞ大変だったろうと想像する。おそらくそのためか、読んでいて、リレーレースのつながりが見えにくいところがある。大変な遅れをとっていたはずのチームが、次のページでは追いついてしまったりしているので、「どっちが速いか!」と推理したりわくわくしたりするには、ちょっと物足りないものになってしまっている。



▲画像13 二階付自動車・地下鉄道の電車

子どもの気持ちになつてみると、ページごとに繰り広げられるレースが一つのリレーにながつていることはわかりにくいと思う。乗り物も、乗り手も変わっていくし、カギとなる赤色と緑色の腕章とバトンは見づらいページもあるからだ。それぞれの乗り物の速さを推理する材料もないし……とすると、このキンダーブックが残したメッセージは何だろう。「速いことはいいことだ」ということだろうか。世界をバトンでつなげば一つになる……というような「絆」的価値観は、この時代にあつたとは想像し難い。昭和初期は、大人たちがこぞつて、世界一周する時間を競い合つていた時代なのである（第四回参照）。

### 比較の先にあるもの

「比べてみよう」というテーマ設定は、観察して客観的に判断のできる目を育てる手だてのようでありながら、なかなかそう単純なものではなさそうだ。「どっちが速い」のように、比較対象に最低限必要な情報が不足していると、ただ与えられたゲームを受け身で見守ることに終始してしまう。特に難しいのは、社会的なテーマを比較する場合だ。暑い国と寒い国の比較は、温度による生活の違いを越えて、その時代の世界観を映し出していた。また「今と昔」の比較では、昔より今のほうが進んでいるという安易な価値観に直結しかねない。世界への拡大、技術の進歩へと邁進しそれを喧伝していた当時の社会では、大人たちのそういうムードを子どもは胸いっぱい吸い込んで、未来を大きなもの、挑戦しがいのあるものと感じていたことだろう。果たして現代の子どもは、どうなのだろうか。

—続く—（引用は、現代文字・仮名遣い等に変えてあります。）